くまざさ

第47号
発行
釧路湖陵同窓会
くまざさ編集委員会
発行日
平成17年8月13日
印刷所
藤田印刷㈱

同窓生校長の思い

北海道釧路湖陵高校
校長　数馬田（かずまた）　敏（さとし）（17期）

本年4月に札幌月寒高校から赴任して参りました数馬田と申します。

生涯の仕事として教職の道を選びましたが、その最後で母校に勤務できることは、望外の喜びであります。

4月以来、皆様の湖陵への「熱き思い」に接する機会が数多くありますが、その都度、本校に対する期待の大きさと責任の重さに身が引き締まる思いが致しております。

4月8日に挙行された入学式の式辞をご紹介申し上げ、ごあいさつに代えさせていただくとともに、校長として、同窓生としての私の思いをご理解いただければ幸甚であります。

今後ともよろしくお願い致します。

【入学式の式辞】

本校は大正元年に旧制中学として開校し、来る平成25年には100周年を迎える屈指の伝統校であります。「誠・愛・勇」の校訓の下、文武両道をモットーに、その理念を「志を高く持ち、易きに流れず」という日々の教育実践に生かして今日を迎えております。

諸君は数ある高等学校の中からこのような本校を選び、そして選ばれて湖陵第58期生になりました。その自覚と誇りを強く持ち、本日からの高校生活に雄々しく立ち向かってほしいと思います。

さて、今、世の中は大きく変化しておりますが、今後、諸君は大きく変わろうとしている社会、換言すれば「先行き不透明な時代」に生活しなければならないのであります。このような不透明な時代ではありますが、間違いなくそれは、「諸君の時代」であり、諸君が創っていく「新しい時代」でもあります。当時、12歳の小学6年生が自分の夢について書いた作文の一部を紹介します。

『僕の夢』

愛知県豊成小学校　6年2組
鈴木　一朗

『僕の夢は一流のプロ野球選手になることです。僕は3歳の時から練習を始めています。そんなに練習をやっているのだから、かならずプロ野球選手になれると思います。―中略―そして、僕が一流の選手になって試合に出られるようになったら、お世話になった人に招待券を配って応援してもらうのも夢の一つです。とにかく、一番大きな夢は、プロ野球選手になることです』と自分の夢について綴りました。

その後、この少年は、見事プロ野球選手への夢を実現させ、さらに大きな夢へと向かいました。

現在、アメリカ大リーグ、マリナーズのイチローは語ります。『今、自分に出来ること、頑張れば出来そうなこと。そういうことを積み重ねていかないと遠くの大きな目標というのは、近づいてこないと思うんです。今、自分がやっていることが好きであるかどうか、それさえあれば、自分を磨こうとするし常に前に進もうとする自分が居るはずなんです』と「夢や目標を持つこと」や「挑戦する気持ち」の大切さについて自ら語っております。

ぜひ、諸君もこれから3年間、自分の夢や目標に向かい、常に自分自身を磨き、前に進み続ける人であってほしいと願っております。

そして、3年間、この湖陵高校で自ら青春をかけ、あらゆる可能性に挑戦して心身を鍛えてください。

私たち教職員は、夢や目標に挑戦する君たちをいつでも応援しています。諸君があらゆる可能性に挑戦し、そして感動を味わうことができるよう、決して心離さず全力を挙げて見守り続けます。

本校の教訓「誠・愛・勇」の下、志を高く掲げ、逞しい心身を持ち、正しい物の見方ができる若者になることを期待して式辞と致します。

目次

「誠愛勇から」湖陵6期生 …… 2.3頁
田巻恒利の知床旅行記…… 4.5頁
各地区湖陵会だより…… 6頁
学園だより …… 7頁
当番期だより・編集後記…… 8頁

誠愛勇から

湖陵6期生の巻

不滅の湖陵魂

十勝沖地震に襲われる

この4月から、続々と70歳代に仲間入りしつつある私ども昭和2ケタ生まれの湖陵6期生（昭和10・11年生）は、昭和26年4月入学・29年3月卒業、普通科6・商業科（1期生）2の8クラス編成であった。普通科は小学区制、商業科は大学区制だったが、どちらもさしたる苦労もなく憧れの湖陵生になれたラッキーな学年だった由。

やや緊張して入学した高等学校だったが、当時声高に喧伝されていた「民主主義」のおかげか、密かに恐れていた先輩諸氏からの制裁等も殆どなく、至極快適な学校生活だった。昼休み応援団の指導による校歌・応援歌練習に少々緊張感を覚え、休み時間スクエアダンスに興ずる先輩女生徒がとてつもなく大人びていることに驚嘆しながらも、1年時が穏やかに過ぎようとしていた3月上旬、突然襲いかかった劇震「十勝沖地震」に泰平の夢を破られた。丁度授業中のこととて、教室の天井を飾っていたヨーロッパ風大型シャンデリアが右に左に激しく振れ、ねじれた煙筒が悲鳴をあげながら抜け落ち、真っ赤に燃え盛る大型の石炭ストーブが火を噴きつつ前後に揺れ動く様は、今でも鮮明に脳裏に焼きついている。家路を急ぐ友人が幣舞橋あたりで釧路川が逆流し川底が見えたと翌日その恐怖を語っていたことを思い出す。それにしても、火事にもならずさしたる怪我人もなかったのは将に奇跡。

校歌斉唱がない

それに比べ2年時は波乱万丈激動の1年というべき年となった。9月21日から創立40周年記念行事が開催され、式典・祝賀会・展覧会・音楽会・演劇発表会等が目白押し、阿部與作校長の銅像除幕式もこれらと一緒に行われた。

さて、この時期校歌について友人たちと種々話し合ったことを思い出す。多分40周年記念式典で校歌斉唱の場面がなかったからに違いない。というのは、当時新しい憲法や教育基本法に基づく民主教育を手探りしていた状況があり、各学校の校歌の多くは戦前に作られたという理由により問答無用で廃止の憂き目に遭い、時代に即した新しい校歌を作る動きが全国的に流行していた時期だったのだ。本校の場合も、応援歌などと一緒に歌われてはいたものの将来の方向性も明示されておらず、いわば日陰の存在、特に公的な場面では世間の目を憚ってか、歌う事を遠慮しているように見えた。そのことが堂々と胸を張って校歌を歌いたいという私達の素朴で切実な願望となっていたものであろう。

ところで、元本校教諭菅原覚也氏作詞の「釧路中学校校歌」（昭和3年）は、「日出づる国」という少々時代がかった語句はあるものの、殊更に皇国史観や軍国主義を鼓吹するものではなく、万古不易の真理に通ずる校訓「誠・愛・勇」を高らかに歌い上げた見事なもの、そして何よりも、荘重且格調高い信時潔氏の曲には捨て難い魅力がある。是非とも新生「北海道釧路湖陵高等学校」の校歌として改めて認知し、未来永劫に歌い継いでいって欲しいと心底思ったものだった。こんな願いが叶い、今や湖陵が丘に縁を結ぶ老若男女が、心おきなく声を限りに（校歌を）歌うことができることに、限りない喜びと幸せを実感するものである。

忌まわしい劫火

かくして何かと慌しかった2年時もやっと終わりに近づきつつあった昭和28年3月22日、湖陵人の心の拠り所であり、心から愛してやまなかったあの校舎が、忌まわしい劫火に包まれ一夜にして灰燼に帰してしまったのである。昭和33年に新任の国語教師として母校に勤務する機会を得た筆者が、「6年前のある日」というタイトルで34年の「湖陵タイムス」に書いた文章が手許にあるので一部引用する。（火災当時は宮本町の刑務所近辺に居住）

『・・・転がるようにして現場に急行、学校の裏手の坂を駆け上がるともう大勢の人達が校具の搬出に取り掛かっていた。火は見えず真っ白い煙が廊下を這っているのが見え

写真説明～平成15年に釧路プリンスホテルで開かれた卒業50周年記念の同期会

るだけ。手近の生物教室・化学教室の長椅子を雪中に運び出した。そのうちに図書室の方が真っ赤に染まった次の瞬間、廊下に充満していた煙が突然火に変わった。こうなってはもう何ら為す術がない。それでも血気盛んな生徒達は、愛校心とヒロイズムの醸し出す妖しい雰囲気に捉われ、煙の中に飛び込もうとするが、先生や消防団の制止にあっては詮方なし。「やんぬるかな」悔しさに歯軋りしながら、荒狂う猛火をただ拱手傍観しているのみ、燃え募る火の手にあおられて流れる汗を拭わばこそ、阿修羅の形相物凄い。次いで火は化学教室の方へなめるように延びてゆく、「薬品が破裂するからさがれ」という声に全員やむなく後退。時々響く破裂音を交えて、黄や緑の炎を発して燃え上がるのを、之がほんとの炎色反応だなと思いながら眺めていた。・(中略)・・一夜明ければ一面の雪景色、黙々と雪を踏みしめながら余燼くすぶる学校へ辿り着いた。肩を落とし校庭に佇む生徒達を前にして、「校舎は焼けたが湖陵魂は健在である。諸君よ、力を合せてこの困難を乗り切ろう」と呼びかけた牧野校長の訓示がジーンと胸にこたえた。・・・』

残された1ケ月余は大変めまぐるしかった。2月中1・2年生は学芸大学釧路分校を借用、3年生は休業、3月は残存校舎の内部を改造した14教室に、2部授業も採用して取りあえず急場をしのぐという有様であった。

卒業式は高台の公民館（現まなぽっと駐車場）を借用、生徒会役員だった筆者は、当時流行っていたNHKラジオ歌謡「雪の降る街を」や「白い花の咲く頃」を口ずさみながら、仲間達と式場設営を手伝ったことなどを懐かしく思い出す。

かくして、大いなる失意と混乱の内に我々6期生は3年生に進級したのである。

新学期、2年生は全員が東中学校に間借りし、1・3年生は、辛うじて焼失を免れた屋内体育館をベニヤ板で間仕切りしたお粗末きわまりない教室もどきで、おまけに天井に全く仕切りがないため複数の先生の声が混線して聞こえて来るのには参った。室内の講義より隣の部屋の講義の方がよく聞こえたというのもあながち誇張とは言えないひどい状態ではあった。更に6月から翌年3月まで、2年普通科6クラスはそのまま東中学校で、商業科は全学年6クラスが旭小学校仮校舎借用と、まるでバラバラ事件さながらの状況に陥ったのである。大事な最後の1年間、学校行事や部活動以外には7期の諸君と顔を合せることが出来なかったわけだから、90有余年を閲する釧中・湖陵の歴史の中でも最も厳しい隠忍を強いられた時期と言ってよいのではなかったか。

逆境をバネに

が然し、かかる逆境の中にありながらも、6期生は後輩諸君と力を合せ大いに頑張ったと自負できるのがまことに嬉しい限りだ。火災で殆どの備品を失った生徒会は、器楽部や野球部等生徒の士気の高揚に効果ありと思われるものに予算を重点的に配分する、前年度から決まっていた全道大会当番校業務の成功に努力することなどを柱として活動を再開、1日も早く元気な湖陵高校への復活を目指して全力投球したつもりだ。

運動面では、宿敵江南に打ち勝ち夏の全道大会に出場した野球部は、準々決勝で優勝候補の北海高校に、秋の新人戦も準決勝で再び北海に惜敗したが、市民は熱狂した。本校グラウンドを会場に開かれた男子バレーボール（当時は屋外競技）では3年連続優勝の強豪旭川西高に初戦で、男子バスケットは前年全国優勝の強豪札幌南高に、国体予選では女子が全国区の岩見沢西高に善戦。テニス部は女子団体が準決勝で函館大谷に敗れたが堂々全道3位、個人戦の谷・齋藤組も3位と大活躍。卓球部も函館商業高に準々決勝で敗れる大健闘と枚挙に暇のない活躍ぶりであった。

一方学習面においても、急造仮設教室という悪条件をものともせず、有名大学への現役合格者数で新記録を樹立したとほめられ、先生方ともども快哉を叫んだのも懐かしい思い出だ。これぞまさに「不滅の湖陵魂」の発露と言っていいのではないかと少々手前味噌の感慨にふけったものだ。

札幌と釧路で同期会

全員が古希を過ぎた我々湖陵6期会は本間秀一君が会長。毎年釧路と札幌で同期会を開いているが大体40人前後の出席者でやや固定化傾向にある。東京の仲間からも時々集まっているとの報告が来ている。今年は札幌が9月16日(金)6時ガーデンパレス、釧路が10月8日（土）6時プリンスホテルと決まった。

一昨年、同窓会からの依頼に応え、全国に散らばる同期生に同窓会館建設資金の寄附を呼びかけたが、時あたかも卒業後50年目にあたっていたので、10月25日「釧路湖陵6期卒業50周年記念同期会」と銘打った大規模な同期会を開催、全国から97名（男41・女56）が参集して楽しく旧交を温める機会を持った。翌日は希望者38名で、世界遺産登録が話題となりかけていた知床1泊旅行、コースは、開陽台・標津サーモンパーク・羅臼・知床峠・知床第一ホテル・摩周湖・阿寒湖・ツルセンター・釧路空港・釧路駅。幸い絶好の旅行日和に恵まれみんな大満足の旅だったが、特に呆けたように眺めいった日没時の知床の夕景とこれ以上の好条件はあり得ないと口々に褒め称えつつその雰囲気を満喫した静謐な摩周湖等、あの至福の時間と充足感が今も鮮やかに脳裏に甦る。観光シーズンが終わった直後という時期であるがゆえの幸便と皆で喜び合ったものだった。

日本人の平均寿命までにはまだ少し時間がある。自愛の日々の先に、もう一度全国の仲間が集う大同期会をこの地で開催するのが、我々釧路に住む6期生のつとめであると思うのは筆者だけではあるまい。

末筆になりますが、昨年9月男澤先生にお会いしました。間もなく90才、何度か入退院なさったそうですが、「俺本人がどこも痛くも痒くもないと言うのに、医者のヤツ、あれもダメ、これもダメだとうるさいことばかり言う…」と威勢のよい男澤ブシ炸裂だったことを申し添えます。

（高井博司　元湖陵高校教諭）

号とバスで
なる）の同窓４人
流氷の旅

田巻恒利（湖陵18期）の青春散歩

雰囲気満喫の席に座り

3月の連休を利用して地元釧路の同窓生の呑兵衛4人（奥田達也先輩74歳、板宗利先輩58歳、増子正樹氏56歳）が釧路駅に集まったのは日曜の午前10時半だった。

出発ホームで列車のヘッドマークを横に記念写真を終え、4号車の座席指定に座る。横にダルマストーブ、天井にはタンチョウ凧、網棚にはシマフクロウのマスコット人形が飾られ旅情をかもしだす。

札幌からの特急列車が隣のホームに着くと大勢乗り込んできて4号車はほぼ満席となる。

定刻の11時11分、低くボウーと腹に響く汽笛とともにガタンと揺れ、列車は釧路駅を離れ、終点の釧網本線標茶駅に向かう。鉄橋を通過する時はカメラマン20名ほどがSL列車にカメラの砲列を構えている。

すぐに我々はテーブルを囲んで酒盛りを始めた。赤々と燃えるダルマストーブでつまみをあぶる。

若い黒人女性が一人ダルマストーブの席に座った。片言の英語でその黒人女性にあぶったつまみを勧めた。

片言の英語に流暢な日本語

「とても美味しい、ありがとう」と流暢な日本語で応えてくれた。〝SL冬の湿原号〟が開業の平成12年以来、国際列車になったとその時感じた。広々とした雪原に枯れた葦の広がる景色はまるで一幅の水墨画を見ている様で心がいやされる。

やがて12時半ころ終点標茶駅に到着、知床国立公園ウトロ温泉（斜里町）行きの手配バスを待つ。

バスの奥の席一列に4人は陣取り酒杯を重ね始める。途中バスは川湯温泉駅（弟子屈町）で15分休憩した。私は駅舎内の足湯温泉に5分間浸ることができた。

バスは野上峠を越えた。ここからは釧路支庁管内弟子屈町を離れ網走支庁管内の清里町だ。奥田先輩は車窓の外に注目し、終戦の年14歳で学徒動員で駆り出された清里町札鶴の山奥に当時の痕跡を探す。

日本百名山のひとつ斜里岳が迫ってくる。なだらかな裾野は黒々とした森林に覆われ山容の上半分は雪に覆われ山頂嶮しく山肌がゴツゴツと男性的である。

学徒動員の山奥を探す

増子氏は早速画帳を広げ車窓から斜里岳の素描を始める。

バスは清里町を離れ知床観光の入口斜里町に入ると海別岳が右手から迫って来た。山頂がなだらかで全山雪に覆われ、ふくよかで女性的な山容である。その山容も増子氏は熱心にスケッチしている。

やがて流氷のオホーツク海が車

SL列車冬の湿原号
知床（世界自然遺産とな
白い湿原と青い流

窓左手の外に広がった。流氷の陰りは鮮やかな緑青を呈し見る者を魅惑する。海面が所々覗かせているので「海開け」と呼ばれる流氷の去る日も遠くない。

オシンコシンの滝はその見上げるばかりの大きな岩肌が氷に覆われ春の暖気のせいか氷の上から水が流れ落ちていた。

温泉入浴から山海の珍味に酒

15時半に今夜泊る知床プリンスホテルに無事到着。ウトロ港より1㌔ほど離れた丘の上にあった。

旅装を解き浴衣に着替える。

部屋の窓から山やオホーツク海は見えない。まず温泉入浴と相成る。大浴場でのんびりと入浴することができた。部屋に戻りホテル無事安着祝いの乾杯。

18時に2階大食堂に向かう、百席ほどの中はほぼ満員満席、バイキング形式で銘々好きな物を食卓に運ぶ。ホタテ、エビ、マグロなどの刺身、生寿司、ビーフシチュー、マスなど山海の珍味に舌鼓を打ち銘々好きな酒類を堪能する。

二次会は1階のカラオケバーで4人全員が得意の曲を披露、部屋で夜中のラーメンを喰う。旨い。

翌朝7時ころ起床すると増子氏がいない。風呂を上がり食堂で「朝5時に起きて港にある展望台に行ってスケッチして来た。絶景だった。展示会に向けての収穫があった」として嬉しそう。知床は現在〝世界自然遺産〟に申請中で今年7月に登録の可否が決まる。

9時半に釧路行きの手配バスがホテルを出発。途中の清里町物産館で休憩できた。清里銘酒イモ焼酎数種の試飲と購入ができ念願が叶った。

秘境知床・油壺のキャンプ

もう17年も昔になる平成元年。湖陵1期の有志が最後のキャンプを知床半島突端の灯台下・油壺港で行った。57歳で健康もさることながらリーダーの組村真平弁護士が札幌へ転居するからである。

羅臼港から岬を廻って油壺港に。3泊4日、晴天に恵まれた。

TV撮影にきた草笛光子さんが「こんな恵まれた所で、羨ましいワ」伴の水野久美さんと……。

7月29日初日に別船できて話しかけてきた。内地の都会から見たら確かに天国だ。大きなハエと熊に襲われなければ。食料はたっぷりもってきている。湧水もある。

エキノコックスは考えない。

テント張り、薪集めは毎年のキャンプで馴れている。料理係りまで役割は決まっている。新人も釣りやマット作りを手伝う。

釧中・湖陵高と6カ年も一緒で毎月市内の料亭で会合を開いている。みんなが親しい間柄。気兼ねもなければ、話題にこと欠かない。喰い呑み、議論に燃えあがる。大声をあげても、ここは地の涯。近所迷惑はない。深夜でも大丈夫。灯は〝原始〟をむねとする。

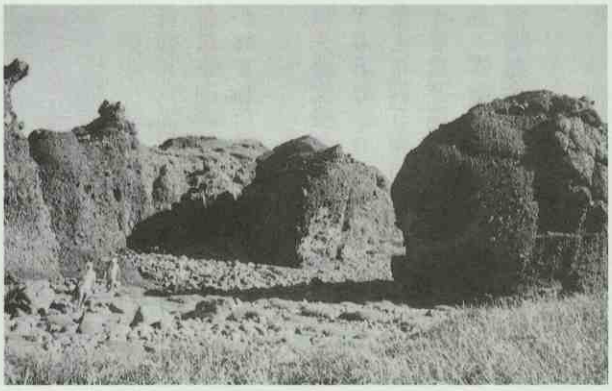
日の出前に、灯台の丘へ登り、御来光を三百六十度パノラマ撮影する。

ウニも採り放題。

後片付けは馴れたもの完璧だ。

もう最後のキャンプと、羅臼側の夕焼けの美景に感激し乍ら航跡を眺めたのである。

再び訪れることの出来ない知床を思い浮べながら……　（奥田）



東京湖陵会

湖陵同窓会東京支部（板本登会長・湖陵16期）の総会が、さる6月18日、東京都新宿区の日本青年館で開かれました。総会には、釧中出身11人を含む、湖陵の同窓生約100人と釧路湖陵同窓会の栗林延次会長、札幌湖陵会の西塚壮市幹事長、釧路市役所東京事務所の岩隈敏彦所長らも出席しました。

当番期を代表して堀裕代表幹事（湖陵28期）が司会を務め、物故者に黙祷を捧げたあと、校歌を全員で斉唱しました。板本会長のあいさつに続いて、伊東良孝釧路市長、初めて湖陵出身校長となった数馬田敏さん（同17期）の祝辞・祝電が披露されました。

総会では、会の名称を「東京湖陵会」とすることや役員改選では、会計監事として、山本雅和さん（同24期）が退任し、三上希予子さん（同18期）が新たに選ばれました。

懇親会は、釧中会前会長の梅津正隆さんの乾杯の音頭で始まり、ジャンケン大会などのアトラクションで盛り上がり、最後に応援歌を大合唱し、来年の再会を誓い合っていました。

※板本登会長
〒160―0013
東京都新宿区霞岳町15
日本青年館内
TEL 03―3475―2556
定期総会6月第3土曜日（予定）

懐かしい校歌を斉唱する東京湖陵会のみなさん

札幌湖陵会

札幌湖陵会（花田孝麿会長・湖陵17期）の第19回定期総会と懇親会がさる7月2日、札幌市内のキャバレー「エンペラー」を会場に開かれました。札幌湖陵会では、出席者の目標を300人としていましたが、313人が出席し、2年連続で目標を達成しました。

総会には、釧路湖陵同窓会の栗林延次会長（17期）、東京湖陵会の小野妙子副会長（11期）、釧中・湖陵同窓会十勝支部の佐藤文俊会長（17期）、釧路湖陵高校の数馬田敏校長（17期）をはじめ多くの来賓も出席しました。

花田会長は、「釧中・湖陵の仲間が集まる今宵は、青春時代にタイムスリップして旧交を温めてください」、数馬田校長は「湖陵への思いは特別な思いがあります。入学式では校歌を聞いて胸が熱くなりました。古き良き湖陵の伝統は受け継がれています」とそれぞれあいさつしました。

なお、役員改選では若い世代の参加を促すため、副会長を1人増員し3人体制とし、新副会長には伊藤拓摩さん（21期）を選任しました。

懇親会では、アトラクションを楽しみながら、高校時代の思い出話しに花を咲かせていました。

※花田孝麿会長
〒003―0001
札幌市白石区東札幌1条3丁目1番35号
北海道コカ・コーラボトリング道央支社
TEL 011―842―0509
定期総会7月第1土曜日（予定）

300人を超える同窓生が出席した札幌湖陵会

十勝支部

釧中・湖陵同窓交礼会（佐藤文俊会長・17期）が、さる3月27日、帯広市内のワシントンホテルで開かれました。

※佐藤文俊会長
〒080―0013
帯広市西3条南7丁目14番地
十勝農業協同組合連合会
TEL 0155―24―4090
定期総会3月第4日曜日（予定）

交礼会に参加した同窓生のみなさん

学園だより

同窓生の皆さまいかがお過ごしですか。「くまざさ」47号発刊に当たり、昨年からの学校の様子を簡単にお伝えします。

〈9月〉

・統一学校説明会。本校体育館を会場にして、道内外約70の大学・短大などが参加し、行われました。各大学のブースに積極的に足を運び熱心に質問する生徒の姿が見られました。昨年度は第2回目で、今年も八月末に第3回が予定されております。地理的・経済的要因で容易にオープンキャンパスに参加できない生徒達に少しでも大学の「生」の姿を感じ取って欲しいと思い企画されました。一つの高校が主催して、このような規模の説明会を開催する例は全国でもほとんど無いそうです。

〈10月〉

・見学旅行。2班編制で1日ずらして出発します。今年のコースや日程は次のようになっております。

1日目　飛行機でまず東京へ行き、羽田空港ですぐ飛行機を乗り継ぎ、伊丹空港まで行きました。バスで伊丹空港から京都のホテルまで行く途中、清水寺を見学しました。

2日目　奈良方面見学の日です。近鉄電車で奈良へ行きバスに乗り継ぎ、法隆寺・薬師寺・奈良公園（東大寺・春日大社など）を見学しました。

3日目　京都自主研修の日です。朝、元気よくホテルを出発した生徒達は、班ごとに立案した計画に従って1日中京都を見学し、夜、無事ホテルに帰ってきました。

4日目　朝、新幹線で京都を出発し東京へ向かいました。東京駅到着後解散し、班ごとの東京自主研修に出発しました。夜までに、宿泊するホテルに直接集合することになっていますが、皆無事ホテルにたどり着くことができました。

5日目　朝早く東京ディズニーランドへ、バスで向かいました。半日ディズニーランドを楽しんだ後、羽田空港へ向かい釧路に夜到着しました。

以上、現在の現役生はだいたいこのような日程で見学旅行を行っています。なお、昨年は第1班の行きの飛行機が強風のため運休になるというアクシデントがあり、何とか女満別空港の最終便で東京に行くことができましたが、その日は急遽手配した東京のホテルに泊まり、2日目の奈良見学をカットするという日程に変更せざるを得ませんでした。

〈1月〉

・センター試験。今年も約200名の生徒が5教科以上で受験しました。80パーセント以上の私大がセンター試験に参加している現在、私大専願者でもセンター試験を受けるのは常識となっています。

〈3月〉

・第56回卒業式。314人の生徒が湖陵の誇りと夢を胸に、学窓を巣立ってゆきました。

今回の卒業生の進学実績は、国公立大現役合格者が96名、私大は202名でした。また2年連続東京大学へ現役合格しており、よく健闘したといえます。

・野村校長を始め7名の教職員が異動・退職しました。湖陵高校のために力を尽くしていただき、どうもありがとうございました。

〈4月〉

・数馬田校長を始め5名の新任教職員を迎えました。

・平成17年度入学式（新入生281名）

・宿泊研修（1年生、川湯温泉）

・湖陵の日（4月29日）昨年からPTA総会と授業公開を併せ、休日に行われております。多くの父母の皆様に参加いただきました。

〈5月〉

・教育実習（32名の卒業生を迎えました）。

・高体連釧根支部予選始まる。12ものクラブが全道大会に進出しました。

〈6月〉

・高体連全道大会始まる。全道大会においては各クラブともよく健闘しました。特に陸上部の井上陽介君は男子1500mと800mの2種目で全道チャンピオンになりました。1500mは昨年に続き大会2連覇です。8月から始まる千葉でのインターハイに出場します。

以上簡単な内容となりましたが、ご容赦下さい。また、今後とも母校のため、後輩のためによろしくお願いいたします。

（渋谷倫之）

総会当番期だより

早いもので前回の幹事期から10年が経過し、今年が2回目の幹事期を迎えました。10年前は諸先輩の言われるままにお手伝いをしただけだったので、幹事の本当の大変さを理解することもなく、ただ漠然と今年を迎えてしまったことを、今になって後悔しております。実際に準備に取りかかったのもついこの間であり、あまりの動きの遅さから諸先輩に厳しい叱咤激励を受けることも度々ですが、動きの遅い亀のように、一歩一歩着実に準備を進めているところであります。

準備を進めていて感じることは、中心の幹事期として滞りなく同窓会を開催することは当たり前、こんな雰囲気が話す先輩皆さんから感じられ、『これが湖陵の伝統なのか！』と、その重圧に押しつぶされそうになることもしばしばですが、33期なりのカラーを出していければいいなと考えております。

期の打ち合わせは毎週行っておりますが、大変な中にも一体感も生まれてきており、和気あいあいと準備を進めております。ある日の打ち合わせ風景。『今日の打ち合わせは、これこれこういうことを打ち合わせましょう。ところで、だれそれさんの消息がわかったよ！』『へぇ～、そうなのか～懐かしいね～♪』『だれそれさんは社長になったんだって！』『学生のときにはやんちゃ坊主だったのにね』など、打ち合わせそっちのけで昔話や同期の近況報告になってしまうなど、ずいぶんと脱線しがちな打ち合わせになってしまっております。しかし、そこは楽天家集団の33期、作業の遅れも何のその、『ま、なんとかなるだろう！』を合い言葉に、少しでも皆さんのご期待に沿えるよう、そして盛り上がる同窓会となるように、また、この伝統を次代につないでいけるように、各自全力投球で頑張っております。みなさん、今年の同窓会をお楽しみに!!

（33期　宮下　誠）

7月12日に開かれた合同幹事会

長内宏元同窓会長が旭日双光章

釧路市医師会会長と釧路方面公安委員長を長年携わってきた長内宏さん（湖陵2期）が旭日双光章を受章されました。

編集後記

4年前、釧路市、釧路町の合併運動から端を発しその後、白糠町、音別町、阿寒町、鶴居村を加えた合併協議会の発足に至り途中、住民投票の結果を得て2町1村が離脱し釧路市、阿寒町、音別町に落ち着いて、今年10月に新・釧路市が目出度く誕生する運びとなった。合併に反対した住民にはどんな理由があったのか考えてみた。合併したら我が故郷地名が消失すると言う住民感情、隣の役所ぐるみで選挙干渉されたと言う住民感情、税金の安い所へ引っ越したのに元に戻りたくないと言う住民勘定、多額の借金を抱えた釧路市と合併したくないと言う住民勘定、苦労して溜めた財政基金を外部で使われたくないと言う住民勘定、防衛施設庁からの特別交付金を市中心街再開発に使われたくないと言う住民勘定。いくつもの後ろ向の「カンジョウ」があった？に違いない。

（田巻恒利）

（写真、右手前より時計回りで）
上岡信明・星　匠・奥田達也
増子正樹・渋谷倫之・田巻恒利

※厚岸くまざさ会
黒田庄司事務局長
厚岸町役場内
Tel 0153－52－3131
※摩周（川上郡）湖陵同窓会
岩崎寛会長
Tel 015－483－2531

釧路湖陵高校
〒085－0814
釧路市緑ケ岡三丁目一番
TEL（0154）43－3131

くまざさ編集委員会

同窓会会長　栗林延次（湖陵17期）
同窓会幹事長　島本幸一（湖陵19期）
同窓会会計長　佐藤文昭（湖陵22期）
編集委員長　星　匠（湖陵30期）
編集委員　渋谷倫之（湖陵26期）
編集委員　増子正樹（湖陵20期）
編集顧問　上岡信明（釧中30期）
編集顧問　奥田達也（湖陵1期）
編集事務局長　田巻恒利（湖陵18期）

くまざさ編集委員会
〒085－0014
釧路市末広町2丁目4番地
栄屋旅館内
TEL0154（23）0241
手動切替FAX
0154（23）0242